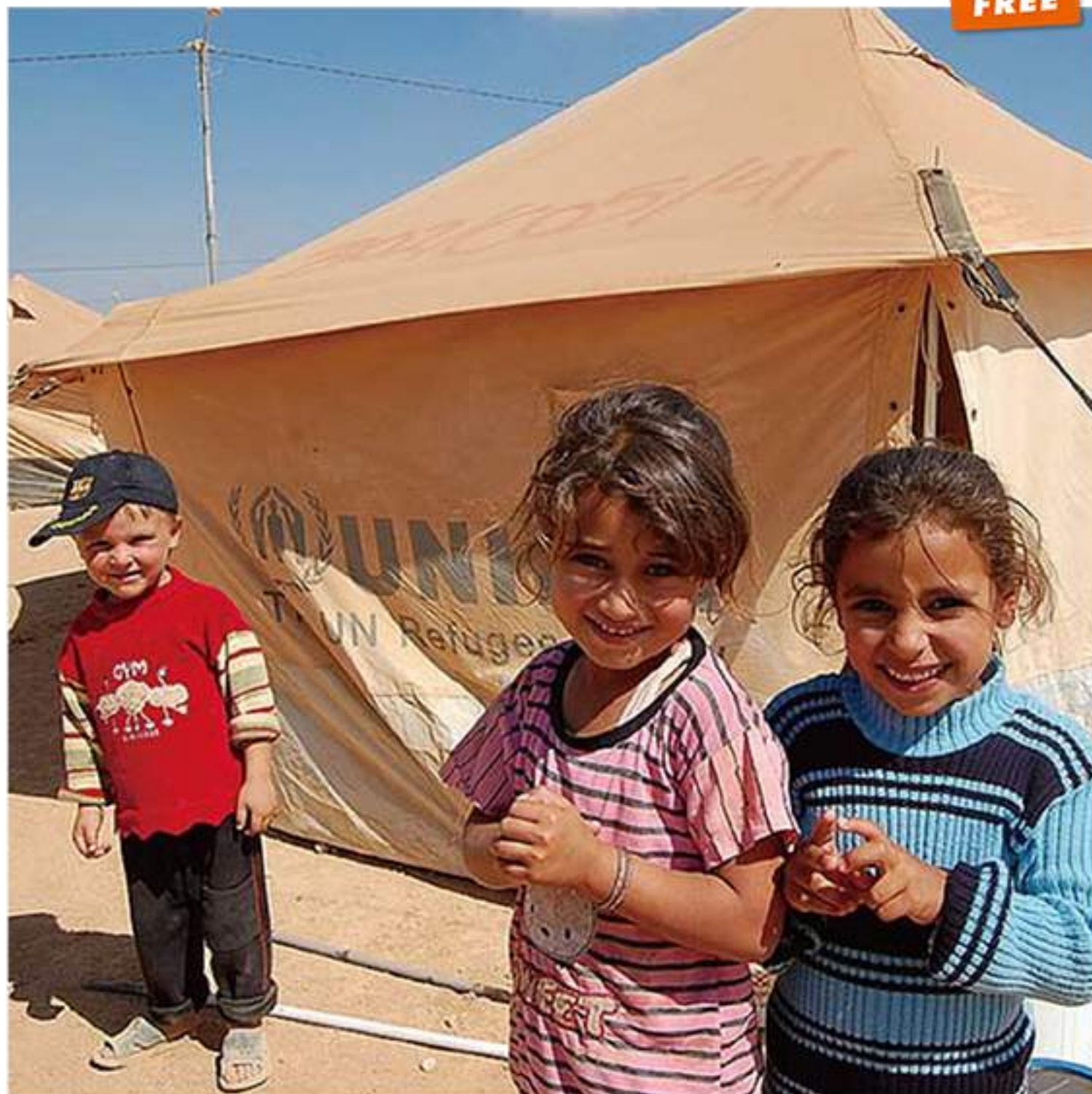


すべては未来の子供たちのために

# Heart&Smile

【ハート&スマイル】Vol.1 2014 December

FREE



ヨルダンのザータリ難民キャンプに流れ、UNHCRのテントで生活するシリア難民の子供たち  
UNHCR © M. Abu Bakr

特別対談  
UNHCR駐日代表 マイケル・リンデンバウアー  
シダックス株式会社代表取締役会長兼社長 志太勤一  
企業CSR活動報告 カゴメ株式会社  
インタビュー 別所哲也



Heart & Smile 第1号 2014年12月10日発行 発行：シダックス総合研究所出版

この冊子は無毒害パルプと環境木を使用しています。



FREE



SHIDAX

ジェシー (ジャニーズJr.)



## その思いが、未来を変える。

いまの社会で、未来が生きがいを持って暮らすのか。  
夢や希望を、持てるだろうか。  
SHIDAXは、未来ある人を応援したい、心をよがる思いを、もっと発信してほしい。  
ほっとするエピソード、笑顔で生きる力に育てほしい。  
この難民たちの思いが世界を変える。

“Heart & Smile 勇気プロジェクト”

勇気をもって踏み出そうとする思いハートの育ちを祈ります。

さあ、今、行動しよう。

sponsored by JOYSOUND

SHIDAX Heart & Smile  
プロジェクトの賛助に  
SMAPが決定!!

SHIDAX Heart & Smile プロジェクトソング  
「ユーモアしちゃうよ」

シダックス総合研究所出版(JOYSOUND) 監修・編集・出版(シダックス総合研究所出版)



おかげさまで、  
エントリー  
80,000人  
突破!

「Heart & Smile Award」開催中! JOYSOUND F1

お問い合わせ: 03-5561-1111

私たちシダックスグループは、生きることを幸福につなげる「人と人の絆」を支え、  
真心を込めて世の中の「大切なこと」を提供しつづける健康創造企業です。

はぐくむ、大切なことのすべて

**SHIDAX**  
<http://www.shidax.co.jp>

特別対談

# すべては未来の 子供たちのために

志太 勤一

シダックス株式会社代表取締役会長兼社長

×

マイケル・リンデンバウアー

UNHCR駐日代表



志太 勤一

多摩大学大学院修了。経営情報学修士。1981年、シダックスフードサービス株式会社入社。以降シダックスグループの代表取締役を歴任。2001年シダックス株式会社代表取締役社長就任。2012年、同社代表取締役会長も兼任。著書に「国際理解に役立つわたしたちのくらしと世界の産業（3）住まいと輸出入（監修）」がプラ社刊など多数。



Michael Lindenbauer

リンデンバウアー駐日代表はUNHCR職員として世界各地で30年近くの業務経験があり、オーストリア、ドイツ、香港、ハンガリー、ミャンマー、アイスランド、スリランカ、スイス、スウェーデンなどの任務を経て、UNHCR駐日代表としてこのたび重任した。責任にはオーストリアドイツ地域事務所代表を務めていた。リンデンバウアー駐日代表はオーストリア国籍であり、法律分野の専門家である。



## ハート&スマイル

すべては未来の子供たちのために

世界は子供たちの「笑顔」でできている。

世界中のすべての人  
一人ひとりの心の中には「想い」があります。

それは  
子供への「想い」。  
親への「想い」。  
パートナーや隣人への「想い」。  
それが真の心——「真心」です。

未来を担う子供たちの「笑顔」を  
創りたいという「真心」。  
私たちはそこから世界を変えていくことができる。

シダックスはこの想いのもと、  
賛同企業とともに  
UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）に協力し  
日本と世界に「笑顔」と「真心」を広める活動を行います。  
それが「Heart & Smileプロジェクト」です。

そして、この冊子は  
「真心」をもって未来に向かう人々を  
応援していきます。

Heart & Smileプロジェクト 特設サイト  
<http://www.shidax.co.jp/heartandsmile>



コンゴ民主共和国でUNHCRスタッフが親子を面談している様子。  
©UNHCR/JP. Taggart

## 特別対談

マイケル・リンデン・パウアー氏  
×  
志太 勤一

すべては未来の子供たちのために

世界を知り、参加意識を高める  
新しいスタイルの社会貢献活動

マイケル・リンデン・パウアー氏（以下、リンデン・パウアー）は、UNHCRの歴史についてお話ししましょう。UNHCRが創設されたのは1950年のことです。第二次世界大戦で発生したヨーロッパの難民問題を解決するための、暫定的な国際機関として発足しました。当初、その任務は数年で達成できる程度のもので考えられていたのですが、その後世界各地で難民問題が発生しました。それで活動期間の延長が必要とされ、結果的に世界中の難民を対象に支援を行う、恒久的な機関として今に至っています。

志太 勤一（以下、志太） 私がUNHCRと出会ったのは、2000年にUNHCRの設立50周年を記念したチャリティのジャズ・コンサートがきっかけでした。長く世界の難民問題に苦しんでいた機関のことを日本の皆さんに知ってもらいたいと思う人々との活動でした。またUNHCRは東日本大震災直後でも支援活動を行いました。彼らの支援に日本人はとも勇気づけられましたし、何より国際社会が私たちのことを気にかけてくれているというところは、震災でダメージを受けた人々には大きな救いになりました。それまで国際機関からの支援を必要とするような経験がなかった被災者生まれの日本人にとって、国連はどこか遠い存在だったと思います。正

直なところ、私自身も支援活動を目の当たりにするまではそう感じていました。しかし実際に日本が支援を受けたことで、思惑しをしなければと考えるようになり、世界の難民問題についても知るようになりました。

リンデン・パウアー 確かに日本における大きな課題は、難民問題をいかに身近に感じてもらうかです。多くの人には難民の現状を詳しく知りませんし、メディアもあまり報道していません。そんな中、シダックスが行っているようなクリエイティブな活動は非常に貴重で有意義なものです。

志太 私たちは募金箱の設置から始め、全国の店舗・施設に置く場所を広げてきました。次にお客様が弊社オリジナルのミネラルウォーター「水の星500mlペットボトル」を買ったとき、10円が国連UNHCR協会を通じて寄付されるという取り組みを始めました。2013年末はお客様に「願いごと」を一つ書いていただく、栄養強化補助食品1個分の50円が国連UNHCR協会を通じて寄付される「One Wish for One Meal」という支援活動を行いました。ひとつの願いが一人の難民の子供の1日の命をつなぐ、というものです。

リンデン・パウアー 「One Wish for One Meal」のような支援活動は、金銭的な支援だけでなく、認知度の向上に重要な役割を果たしてくれています。

志太 我が国のCSR（企業の社会的責任）活動としては、企業利益

の中からの寄付という形が主流です。しかし、それでは、お客様自身が支援をしているという実感が薄い。また、寄付活動によって賞賛されるのは企業だけということになり、違和感を感じます。

お客様が直接、難民支援ができる形が、あるべき姿だと思います。それが一人でも多くの人に難民問題を知ってもらう機会になると考えています。

リンデン・パウアー 今回の「Heart & Smileプロジェクト」もその一環ですか？  
志太 お客様自身が支援の一員となること、企業がその事業活動そのものを通じて支援を行うことを目指しています。新しい形のCSRだと思っています。



SMAP Heart & Smileプロジェクトの決定!!  
「ユニセフ・スマイル」

国連難民高等弁務官事務所

# UNHCRの活動とHeart & Smileプロジェクト。

世界で支援を必要としている難民や国内避難民の数は約5100万人。彼らのために働くUNHCRと、その活動を支援しようとするシダックスの「Heart & Smileプロジェクト」とは。



このプロジェクトは私たちだけでなく、エクシング様、ハウス食品様、サントリービリアルスピリッツ様といった企業の皆さんの協力を得て展開しています。

このようにプロジェクトの志に賛同いただける企業の方々の参加を増やして、今後もっと活動を広げていきたいと思っています。本誌はそうした活動をリポートし、より多くの方々の理解をいただくために創刊しました。

リンデン・パウアー 難民が年々増え続けている状況下で、民間企業や個人の理解や支援は欠かすことができません。多くの人の参加意識を喚起していくというシダックスの活動に期待しています。

人ひとりの力、可能性を信じる大切さ

志太 しかし、UNHCRの活動というのは説明するのが非常に難しいですね。私たちはUNHCRがどのような機関なのかを伝える役割を果たしていきたいと思っています。UNHCRは高等弁務官を筆頭に個人が直接、紛争を逃れた人々の現場に乗り込み、活躍する姿が特徴ですね。

リンデン・パウアー その通りです。志太 一人の力で多くの人の命を救えるという事実は素晴らしいことです。現在の日本では、自分一人が正しい思いをもっていても、社会は変わらない、まして世界の悲慘な状況を知っても、それを伝えることはできないという。「諦め」の意識が広がっています。でも、そんなことはない、私は信じています。UNHCRは人ひとりの可能性を示してくれていると思います。

リンデン・パウアー 厳しい現実と直面したとき「悲観なことではあるけれど、私にはどうすることもできない問題だ」とあきらめがちです。でも、一人ひとりの規模は小さくても、行動を起こしている人々は世界にも、日本にもいます。あまり知られていませんが日本も難民を受け入れています。

志太 「ハートとスマイル」は一人ひとりの、小さな一歩を踏み出す「勇気」を応援するプロジェクトです。「1曲歌う」「1食食べる」ことが、世界の問題解決につながる。誰もが、誰かを救うことができる。一人でもできることがあると知り、勇気をもって一歩を踏み出すことが、未来への希望につながるのだと思います。



日本の皆様へ。  
マイケル・リンデンバウアーさんと志太 勤一からのメッセージ。

## To young people in Japan

マイケル・リンデンバウアー

Be as interested as possible, not only in domestic affairs, but also in international matters, in things that happen outside of Japan. Because we are living in a very interconnected world, and by knowing the global context, we are in better position to find answers to today's questions. And good answers are critical, even if we just look at the number of more than 51 million displaced people worldwide. Also be engaged in activities that involve a human value and personal interactions. This can be anything from supporting an elderly person, a refugee or another disadvantaged member of our society. This is not only good for those who receive your help, but also for yourself. From my own experience, I know that this is very enriching and it helps to put things and problems one faces in our day to day lives into perspective.

### 日本の若い皆様へ

興味の対象を日本に限定せず、海外で起きている出来事や国際問題に傾き関心をもってください。私たちは国境を超えて相互につながりあった世界に移っています。世界全体の動きを知ることは、現代社会が抱える様々な問題を解決するのに役立つはず。全世界に5100万人もの難民がいるという深刻な事例一つ取ってもわかるように、私たちはこうした社会問題への有効な解決策を一刻も早く探し出す必要が

あるのです。それから、人との交流や人道的な価値観が求められる活動に参加してください。高齢者に手を差し伸べたり、難民や社会の中で不利な立場にいる方々を支援したりするなど、どんなことでもかまいません。人生が豊かになりますし、日常生活で直面する様々な問題の全体像が見えてくるはずです。こういった活動が自分の糧になるということは、私自身も身をもって経験しています。

## Making children smile.

志太 勤一

Please look at the photograph on the cover page. Children are smiling. Their smiles have power and I know that even under adverse conditions, they are capable of smiling. If you see a smile, it means there's peace in some way. It is adults' sincerity and kindness that makes them smile. What we can give may be small. It may be just one meal. But that help still makes them smile. I believe that it is our constant effort that makes our future, and the more children smile, the more the world become peaceful.

### 子供たちに笑顔

表紙の写真をご覧ください。子供たちは笑っています。子供たちの笑顔には力があります。子供たちは、どんな環境にあっても希望を見出し、笑顔になる力をもっています。笑顔がある。そこには小さくても平和があるということです。

子供たちの笑顔を作るのは大人の真心です。私たちにできることがたった1回の食事の提供であっても、子供たちの笑顔を作ることができます。その積み重ねが未来を創り、笑顔の分だけ世界は平和になると信じています。

誰もが共通にもつ想いから始めよう

リンデンバウアー UNHCRが行う支援は基本的に任意の寄付によって成り立っていますので、一人でも多くの方に難民の現状を知っていただくことは非常に意味のあることです。

志太 読者の皆さんの中には、難民問題や、UNHCRがどんな支援をしているのかをよく知らない方もいらっしゃると思います。今、世界の状況はどうなっているのかお話しただけですか？

リンデンバウアー 現在、第二次世界大戦以降最多の、5100万人以上の人が難民もしくは国内避難民として何らかの支援が必要な状態にあります。

志太 たとえばアフガニスタン、スーダン、ソマリアなどの国では、難民問題が未解決のまま何年も続いています。その結果、数世代にわたり難民として支援を受けながら生活しなければならぬ家族がたくさん発生しています。

志太 また、現在難民が増えている地域としては、シリアが最も深刻です。320万人もの難民がシリアから近隣国に流出し、国内にも650万人の国内避難民を抱えています。彼らへの支援を怠れば、国そのものが破綻しかねない危機的な状況なのです。シリアからの難民を受け入れているレバノンには、人口がわずか400万人。しかしこの小国に暮らす難民の数は、110万人を超えています。

都市部では2、3人に一人が難民という、信じられないような状況なのです。我々が支援をしていかなければ、レバノンも国として成立しなくなってしまうでしょう。難民の増加は支援する私たちの財源の枯渇につながる深刻な問題です。

志太 「エコー」のユニセフプロジェクトは、皆がそれらの問題について知り、考えるきっかけになればと思っています。

リンデンバウアー 忘れてならないのは、私たちも、難民となった人々も同じく普通の人間であるということです。シリアの難民の話をよく聞くことがあります。彼らは自らが難民になるとは思っていません。自分たちが語り出す。難民となる前は普通に生活をしていて、我々と同じ普通の人々なのです。

志太 そうですね。人間は皆、親から子へ、子から孫という一連のつながりの中にいます。そして、我が子に服を着せ、おいしい食べ物を与えたい、子供の笑顔が見たい、という「親が子を思う気持ち」は、世界中の人間に共通の願いではないでしょうか。そこには人の真実の心——真心があり、それこそが正義だと思います。

志太 でも、世界にはその願いをかなえられない親たちがたくさんいます。なぜそのような状況が起きているのかを考えることが大切なのではないでしょうか。

「Heart & Smileプロジェクト」は、誰もがもつ「子供の幸福への想い」をベースにしようと考え、「すべて

### 【UNHCRの概要】

UNHCRは「国連難民高等弁務官事務所」United Nations High Commissioner for Refugeesとは難民の保護と支援を行う国際機関。1950年にスイスのジュネーブを拠点に創設されて以来、世界の各地に事務所を置き、難民に関する問題の解決を任務として活動している。創設当初は第二次世界大戦後にヨーロッパに発生した難民を支援の対象としていたが、現在の対象は難民にとどまらず、出身国の状況が改善して帰国を希望している帰国民、自国内で難民のような状況に置かれている国内避難民、そして世界で1000万人以上もいる無国籍者なども含め、地域を問わず支援をしている。

は未来の子供たちのために」というメインテーマを掲げているのです。

リンデンバウアー 難民も私たちも同じ人間。そして人間の根本には共通の想いがある。人々の理解が深まれば、支援は自然と後につくのです。このことは日本の皆様にも伝えたいところです。

志太 良心や、人を思いやる気持ちというものはすべての人に備わっているのだと思います。自分も、他の人からの思いやりやケアによって生かされているのだと知れば、世界の見方が変わります。

現在の社会は必ずしも「真心」が活かされていないかもしれません。しかし、あきらめず、「世界を知ろう」「個の力を信じよう」と勇気をもって一歩を踏み出すこと。そこから「真心」を交わしあう世界は生まれ、子供たちの「笑顔」があふれる未来が拓かれます。皆さん一人ひとりの小さな「勇気」を応援するのが「エコー」のユニセフプロジェクトなのです。

### 特別対談

マイケル・リンデンバウアー  
志太 勤一

すべては未来の子供たちのために



## ご寄付のお願い

特定非営利活動法人 国連UNHCR協会

JAPAN FOR



国連UNHCR協会

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)は1950年に設立された国連の難民支援機関です。紛争や迫害により故郷を追われた難民・避難民を国際的に保護・支援し、難民問題の解決に向けて働きかけています。この国連の難民援助活動を支えるため、広報・基金活動を行う公式支援窓口が、国連UNHCR協会です。皆様のご支援を、心よりお願い申し上げます。

ご寄付のお申し込みはウェブサイトからお願いします。

シリア 支援 検索

※ご寄付は税制優遇の対象となります。

国連UNHCR協会の公式アカウントご案内



©UNHCR/J. Edman



©UNHCR/J. Edman



©UNHCR/S. Gahrwin



©UNHCR/J. Edman



©UNHCR/S. Gahrwin

p08 / エジプトのカイロにある住家のアパートから身を乗り出すシリア難民。9歳のマフムード。p09上 / スウェーデンの地元学校の前に出るマフムード。あと1週間前、新しい学校生活が始まる。p09下左 / シリアに雪は降るものの、マフムードと幼い兄弟は初めてそりを体験。これから雪のスポーツをもっと経験できるだろう。p09下中 / 新しい自宅で2歳半の妹ビサムに読み聞かせをするマフムード。p09下右 / 1月の雪降る夜に飛行機でスウェーデンの空港に降り立つマフムードとその家族。

しかし、「死の航海」と呼ばれる船による出国もまた困難なことは明らかです。不運なことにマフムードが乗船した船は、エジプト海峽から出る前に炎上しました。マフムードがカイロに戻ると、再びいじめが始まりました。UNHCRがマフムードに取材したとき、彼はどのように涙をこらえ「学校へも行けないし、一緒に遊ぶ友達もいないので、エジプトに未来はない。だからまた乗船するのを恐れない」と語りました。「いつかもっと安全な場所、新しい家を持つことが夢。学校へ行って、新しい友達を作ります」と、彼は固く決意したのです。

### スウェーデンで始まった、新しい人生に希望を見出す

UNHCRは、第三国定住プログラムの一環としてシリア難民を受け入れ始めたスウェーデン政府に、マフムードのケースを提出。2013年12月、マフムードが最初に船に乗り込んだ3か月後、彼の家族はスウェーデンに受け入れられ、スウェーデン中心部の小都市、トルスビーに住むことになりました。幼いマフムードには、学校や家、父親の仕事の

ことなど、今後の生活がどうなるのか、期待の反面、大きな不安もありましたが、最終的に彼は、人生の再出発を強く望んだのです。翌年1月、スウェーデンの空港からトルスビーに向かう途中の車中で、スカイフにのったマフムードは言いました。「人生でかつて2回旅をしました。でも、それは逃げるための旅でした。今回の旅で、僕は新しい人生を始めます」。置いて数日、一家はスウェーデンの身分証を受け取り、地元の福祉サービスを受け、極寒の気候に適した衣服などを与えられました。マフムードは恐れることなく外で遊ぶことができようになりました。初めての雪合戦に参加し、2年ぶりに学校で学ぶ機会を得たのです。初日の授業の後、マフムードは笑顔で「学校を見たとき、わくわくしました。そして、新しい友達ができたとがとて嬉しかった」と話しました。最初ははにかんでいましたが、今では簡単なスウェーデン語で自己紹介ができるようになりました。トルスビーに春が訪れましたが、シリアやエジプト、海上での恐ろしい日々をマフムードは決して忘れないでしょう。しかし、彼が話す様子には、新たな自信が感じられます。「今僕は、暴力や殺人や戦争から遠く離れて、新しい人生を踏み出したのです」と語り、こう続けました。「もし友達や、僕のかつての生活を尋ねたら、それがとても困難であったこと、そして今の生活がとても恵まれていることを話さずしては」

### エジプトでの困難な生活、イタリアへ出国を図る



シリアでは、2011年3月から政情不安が続き、紛争の激化により故郷を追われる難民・避難民が増え続けています。2014年10月の時点で、約320万人が周辺諸国に避難。UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)では今年末までに、難民の数は約395万人に増えたと予測しています。シリア国内でも650万人以上が国内避難民となり、国民の半数近い1000万人近くが緊急援助を必要としています。

シリアのアレッポという街に住んでいたマフムードも難民の一人です。国内の戦況が激化し、マフムードは2012年の秋、9歳のときに家族と一緒に故郷からエジプトに逃げ、一家はカイロ郊外のアパートに借りました。しかし避難生活は厳しく、2013年6月に政権が交代すると、状況はさらに悪化。世論はエジプトに保護を求める30万人のシリア人に否定的となり、マフムードは現地の少年たちからいじめられ、それは暴力へとエスカレートしました。彼は命の危険を感じ、学校に通えなくなり、パンを売っていた父親のモハメドを手伝うことにしたのです。モハメドもまた、息子の将来に思い悩んでいました。そしてついに、息子を一人でイタリアへの密航船に乗せることを決意。「本音の恐怖の中で暮らさなければ、息子を一人で外の世界に出すことはないでしょう。ここでの生活はそれほど困難なのです」と、モハメドは説明しました。

## 子供たちの笑顔を目指して、UNHCR活動報告

紛争が激化するシリアから、家族とともにエジプトに逃れ、その後、たった一人で違法と知りながら、わずかな希望を抱き、密航船に乗り込んだ少年、マフムード。船は射撃され、エジプトに戻されてしまいました。彼は新しい人生のために、再び旅に出ることを恐れませんでした。

## 新たな人生を踏み出すために、命がけで海を渡った シリアの少年の物語